

セミナー「初期シェイクスピアとその周辺」レジュメ

コーディネーター 高田茂樹

本セミナーでは、シェイクスピアが劇作家として登場してくる頃の状況に照らして、この時期のシェイクスピア劇の主要なジャンルの一つである英国史劇を中心に、そこで現れたものが、彼の後の創作にいかに関がっていくかを、さまざまな角度から考察することに努めた。

当初の思いとしては、シェイクスピアが当時関わった劇団や他の劇作家との共作関係などにも光を当てたかったが、あまりに不確実なことが多く、また、そこから作品そのものの解明に資するものが得られそうになかったこともあり、今回は断念した。

そういう次第で、議論はおおむね作品の内部を巡るものになり、とりわけ、『ヘンリー六世』三部作について、議論の多くが集中したが、近年シェイクスピアの作とされることの多い『エドワード3世』についての新しい見方も提起された。

各氏の発表のレジュメは、以下の通りである（敬称略）。

小町谷尚子

「ハイブリッド劇--ピカロ Jack Cade がもたらすもの」

本発表では、ナッシュが英国演劇の特徴を善と悪を単純化した詩的正義のストーリーに認めたのに対して、シェイクスピアは重層的に詩的正義を書き表している点に着目し、*Henry VI, Part 2* の Jack Cade の造形の分析を通して、シェイクスピアの独自性

を検証した。初期歴史劇はピカレスク小説が芽吹いた時期に執筆されていることに着目し、Cade の特性にピカロの片鱗が認められること、劇の筋立てに絡むだけでなく観客に劇世界を共有させる原動力となったことを議論したものである。1) まず、フォリオ版の Cade が混乱を招く性質を付与された人物を含意する Morisco と形容されていることを取り上げ、Cade が単に York に利用されるだけの人物ではなく、批判的な潜勢力を付与されていることに読み出した。2) 続いて、Cade の風刺的性格の分析においては、シェイクスピアが歪像画法と同じ手法で Cade の言葉に詐術の表現を含め、自己肯定を通して劇世界を歪めて見せる視点を提供する人物として Cade を造形していることを導き出した。3) さらに、時代性を映し出し現状をコメントする人物の起源に着目して、同時代の他の文芸についての分析を加えた。冒険をしながら風刺を行って笑いを振りまく人物は、当時の笑話集、Robert Greene のいかさまに関するパンフレットや種々の散文物語に共通して登場すること、彼らが rascal、rogue、knave、スペイン語で picaro と呼ばれる類の人物であることを確認し、シェイクスピアの劇におけるピカロの生まれる土壌となっていることを指摘した。4) 最後に、ピカレスク小説の出現する以前に、人間、特に王侯貴族の暗部を抉る人物としてピカロの Cade を登場させたことがシェイクスピアの歴史劇の隆盛に一役買ったことを明らかにした。

真部多真記

『ヘンリー六世』第二部の民衆暴動表象」

『ヘンリー六世』第二部におけるケイドの乱は、人々の記憶に残る1381年のワット・タイラーの乱の革新的な思想を盛り込みながら、庶民の階級社会に対する不満を暴力という形で表している。肉体性と喜劇性をそなえたこの民衆暴動は、経済的・社会的危機に直面していた1590年前後の観客の共感を得ただろう。しかし、この劇では暴動はあっけなく終わり、ケイドは階級社会そのものを体現しているアイデンによって斬首されてしまう。たとえケイドの乱がこのように悲惨な終わり方をしているとしても、この暴動のなかに決して消えることのない庶民の抵抗を見出すことはできるだろう。しかし、1590年代の民衆暴動を描いた一連の劇との関連でこの劇を見てみると、必ずしもそうとは言えない。例えば、『ジャック・ストロー』のように、ジョン・ボールによる暴動の理論的正当化があったとしても、民衆暴動は最終的に、暴動が内包する破壊的エネルギーによって自滅してしまう。同様にケイドの乱も彼らの残忍性が舞台上で増していくと観客との距離は次第に広がっていき、最後はケイドを劇世界から追放することで暴動の痕跡を最小にする。

このような描写の工夫に、シェイクスピアがこの先描いていく歴史劇の方向性をみることができる。第二・四部作にむかって、シェイクスピアは歴史劇から喜劇的庶民性をなくしていくかわりに、国王や貴族の物語を中心に据える歴史劇を構築していく。その片鱗が『ヘンリー六世』第二部に見られると結論づけた。

シェイクスピア初期の歴史劇『ヘンリー六世』第二部に「周辺」がどのように影響していたのかについては、今回は十分に検討できなかったシェイクスピアとサザック地区の布地加工業者との

関係について、あるいはエリザベス朝演劇における想像力と権力の問題についても視野を広げて考察を続けたいと思う。

田村真弓

「『ヘンリー六世』三部作に見られるエリザベス女王の表象—
Cynthia と Amazon をめぐって」

本セミナー発表では、シェイクスピアの活動以前に演じられた劇と行幸の余興に見られるエリザベス女王の姿と『ヘンリー六世』三部作に登場する乙女ジャンヌとマーガレット王妃を比較し、政治的背景や女性君主論を考察することで、シェイクスピアの用いたエリザベス女王の表象の意義を明らかにすることを目的とした。

まず、シェイクスピアが劇作を開始した当時、50代後半で独身のエリザベス女王が、処女の守護神、月の女神の「ダイアナ」「シンシア」「フィービー」として表象されていたことを、ジョン・リリーの『エンディミオン』やコードレイ、エルヴェサム、ビシャム・アビー、スードリー城での余興を分析することによって確認した。次いで、『ヘンリー六世』の劇中に、貞節な処女「シンシア」のイメージで登場する乙女ジャンヌとマーガレット王妃がエリザベス女王を想起させることを論じた上で、二人が「アマゾン」の表象を通じて、勇敢な女戦士へと変貌を遂げることを指摘した。さらに、この「アマゾン」の表象の背景には、スペイン無敵艦隊に対する勝利を祝う長編詩「エリザベスの凱旋」とスコットランドのピューリタン聖職者ジョン・ノックスの著作『恐るべき女性統治に対する最初の警告』で用いられた「アマゾン」の

表象が存在することを示した。そして、エリザベス女王を連想させるジャンヌとマーガレットが、たくましくも残虐な「アマゾン」として描かれた理由には、イングランド国民の強力なリーダーを求める思いと女性君主に対する恐怖心という両義性が存在したのではないかと結論付けた。

田邊裕子

「戯曲『エドワード3世』の両義性の再考」

エドワード3世といえば、スコットランドやフランスにおける軍事的采配についてその手腕が称えられる、イングランドにとっての国家的英雄である。そして、戯曲『エドワード3世』が執筆されたとされる1590年前後は、英雄を中心に据えた歴史劇が多く登場する時期である。しかし、戯曲『エドワード3世』については、権力の表象の「両義性」、すなわち愛国的なテーマと普遍的な道徳的テーマの拮抗が指摘されてきた。

本発表では、本作について指摘されてきた2種類の英雄像が、実際は拮抗していないことを明らかにし、愛国的側面の弱さを結論づけて「両義的」と評価されてきた点に疑問を投げかけた。注目した点は2点ある。1点目は、2幕1場、部下のロドウィックとの場面において、エドワード3世の滑稽な様子が強調されることである。この一連の場面が喜劇的であることは、先行研究も指摘するところであるが、筋を理解する上で重要視されたことはなかった。ロドウィックは、エドワード3世が恋に溺れる様子を観察し、独白において描出し、王の姿が愚かなものとして観客の目にも映るよう、視点を共有する。このように視点が設定されて

いることを踏まえ、2幕2場の末尾の台詞のみにおいて、彼が改心し、学習したことを示し、その後の場面で自己投影し模倣したくなるような英雄として姿が変わると考えるのは困難である。次に、2幕2場の後半で伯爵夫人が果たす役割がとても大きいことに注目した。既に多くの先行研究によって、伯爵夫人と、ヴィリエ、そしてシャルルの間、誓いを重んじる態度が共通すると指摘されてきた。この3人は、人間の社会的地位に従って誓いが都合よく無効化されてしまうことを正す。本発表ではそれに加えて、力が弱いほう、身分が低い方の者が美德と主体性を両立させる様に焦点が当てられていると主張し、国と国との戦い以前に、身分の下の方が権力に対して、誓いを立てる者としての主体性を死守する戦いがあるということを、本作が繰り返し提示していると結論づけた。

高田は、フロアの質問に答える形で、当時の歴史劇は、ナショナリズムの高揚とその背後にあるエリザベスの老いと将来への不安といった脈絡で論じられることが多いが、シェイクスピアの歴史劇の場合、彼が少年期に体験した家の没落とそれを自分の力で取り戻すのだという強い意志という彼の精神的なありようが絡んでいて、個人の来歴と歴史的な状況とが深く響き合う形で彼の創作の背景をなしているのではないかという見解を説いた。

そして、最後に、以下のような談話で、セミナーを締め括った。

シェイクスピアの劇では、例えばトールボットの勇壮で国を思う姿が称揚されて見える一方で、彼自身は国内の貴族たちの内紛と怠慢の犠牲となって討ち死にし、彼に体現された人間像は滅び

去ってゆくものとして描かれている。

このように、一つの立場・見解を取るよう一方に仕向けながら、同時にそのことの無理を提示して、示された側が、では自分にはどういう立場、視点があり得るのか、繰り返し自問するよう迫るというところに、シェイクスピアに固有な特質があるのではないだろうか。

このように、観客・読者に内的な対話を続けるよう迫る傾向は、どこか深い余韻、味わいを後に残して、そのことは、長い目で見れば、エリザベス朝の演劇を変えてゆく大きな力となったように思われる。

